

黒島傳治全集

I

黒島傳治全集

I

筑摩書房

黒島傳治全集 第一卷

昭和四十五年四月三十日 第一刷発行

著 者 黒 島 傳 治

発行者 竹之内 静雄

発行所 株式会社 筑摩書房

東京都千代田区神田小川町二の八
郵便番号 一〇一―一九一
振替東京 四一―一二三
電話東京(二九一) 七六五一(代表)
印刷・明和印刷 製本・和田製本

© 黒島 1970

(分類)0393 (製品)71501 (出版社)4604

小説集 I

電報	3
窃む女	9
砂糖泥棒	18
まかないの棒	23
「紋」	28
田園挽歌	32
崖の上	68
路傍の草	79
粟を食う牝牛	82
老夫婦	85
二銭銅貨	99
半鐘	102

組板と搦古木	109
隔離室	113
百姓の鞭	121
ある娘の記	133
村の網元	143
孟蘭盆前後	156
踏み台	163
栗本の負傷	169
春の一円札事件	180
豚群	187
本をたずねて	194
リヤーリヤとマルーシャ	199
彼等の一生	208

雪のシベリア	220
脚を折られた男	229
幼時	237
櫓	242
渦巻ける鳥の群	254
若い妻	272
その手	277
穴	281
田舎娘	293
脚の傷	303
氾濫	310
パルチザン・ウォルコフ	335
氷河	351
解説（小田切秀雄）	373

小説集
I

電報

一

源作の息子が市の中学校の入学試験を受けに行っているという噂が、村中にひろまった。源作は、村の貧しい、等級割一戸前も持っていない自作農だった。地主や、醬油屋の坊っちゃん達なら、東京の大学へ入っても、当然で、何も珍らしいことはない。噂の種にもならないのだが、ドン百姓の源作が、息子を、市の学校へやると云うことが、村の人々の好奇心をそそった。

源作の噂の、おきのは、隣家へ風呂を貰いに行ったり、念仏に参ったりすると、

「お前とこの、子供は、まあ、中学校へやるんじゃないかいな。銭が仰山あるせになんぼでも入れたらえいわいな。ひょろろ」と、他の内儀達に皮肉られた。

二

おきのは、自分から、子供を受験にやったとは、一と言

も喋らなかつた。併し、息子の出発した翌日、既に、道辻で出会った村の人々はみなそれを知っていた。

最初、

「まあ、えら者にしようと思うて学校へやるんじゃないやろ。」と、他人から云われると、おきのは、肩身が広いような気がした。嬉しくもあった。

「あんた、あれが行たんを他人に云うたん？」と、彼女は、昼飯の時に、源作に訊ねた。

「いゝや。俺は何も云いやせんぜ。」と源作はむし／＼した調子で答えた。

「そう。……けど、早や皆な知って了うとら。」

「ふむ。」と、源作は考えこんだ。

源作は、十六歳で父親に死なれ、それ以後一本立ちで働きこみ、四段歩ばかりの畠と、二千元ほどの金とを作り出していた。彼は、五十歳になっていた。若い時分には、二万三万円の金をためる意気込みで、喰い物も、ろくに食わずに働き通した。併し、彼は最善を尽して、よろ／＼二千元たまつたが、それ以上はどうしても積りそうになかつた。

そしてもう彼は人生の下り坂をよほどすぎて、精力も衰え働けなくなつて来たのを自ら感じていた。十六からこちらへの経験によると、彼が困難な労働をして僅かずつ金を積んで来ているのに、醬油屋や地主は、別に骨の折れる仕事もせず、沢山の金を儲けて立派な暮らしを立てていた。また彼と同年だった、地主の三男は、別に学問の出来る男では

なかったが、金のお蔭で学校へ行つて今では、金比羅さんの神主になり、うま／＼と他人から金をまき上げてゐる。彼と同年輩、または、彼より若い年頃の者で、学校へ行つていた時分には、彼よりよほど出来が悪かった者が、少しよけい勉強をして、読み書きが達者になった為めに、今では、醤油会社の支配人になり、醤油屋の番頭になり、または小学校の校長になつて、村でえらばつてゐる。そして、彼はそういう人々に対して、頭を下げねばならなかった。彼はそういう人々の支配を受けねばならなかった。そういう人々が村会議員になり勝手に戸数割をきめてゐるのだ。百姓達は、今では、一年中働きながら、儲えなければならぬようになつた。畠の收穫物の売上げは安く、税金や、生活費はかさばつて、差引き、切れこむばかりだつた。そうかといつて、醤油屋の労働者になつても、仕事がいかに安く、賃銀は少なかった。が今更、百姓をやめて商人に早変わりをするのも出来なければ、醤油屋の番頭になる訳にも行かない。しかし息子を、自分がたどつて来たような不利な立場に陥入れるのは、彼れには忍びないことだつた。

二人の子供の中で、姉は、去年隣村へ嫁づけた。あとには弟が一人残つてゐるだけだ。幸い、中学へやるくらい金はあるから、市で傘屋をしてゐる従弟に世話をして貰つて、安くで通学させるつもりだつた。

「具合よく通つてくれりやえいがなあ。」と彼は茶碗を置いて云つた。

「そりや、通るわ。一年からずつと一番ばかりでぬけて来たんじやもの。」と、おきのは源作の横広い頭を見て云つた。胡麻塩の頭髮は一カ月以上も手入れをしないので長く伸び乱れてゐた。

「いゝや、それでも市に行きやえらい者が多いせにどうなるやら分らんで。」

「毎朝、私、観音様にお願を掛けよるんじやものきつと通るわ。」

源作は、それには答えなかった。彼は、息子が中学を卒業して、高等工業へ入つて、出ると、工業試験場の技師になり、百二十円の月給を取るのを想像してゐた。

三

市の従弟から葉書が来た。息子は丈夫で元気が好いと書いてあつた。県立中学は、志願者が非常に多いと云つて来た。市内の小学校を出た子供は、先生が六カ月前から、肝煎つて受験準備を整えてゐる上に、試験場でもあわてずに落ちついて知つて居るだけを書いて出すが、田舎から出て来た者は、そういう点で二三割損をする。もつとも、この子はよく出来るといふことだから、通ることは通るだろうが、と書いてあつた。

「通つたらえらいものじやがなあ。」源作は、葉書を喉に読んできかせた後、こう云つた。

「もつと熱心にお願をするわ。」

こういうことを、神仏に願っても、効くものでない、と常々から思っている源作も、今は、妻の言葉を退ける氣になれなかった。

源作が野良仕事に出ている留守に、おきの叔父が来た。「そちな、子供を中学校へやつたと云うじやないかいや。一体、何にする積りどいや」と叔父は、磨りちびてつるつるした縁側に腰を下して、おきのに訊ねた。

「あれを今、学校をやめさして、働きに出しても、そんなに銭はとれず、そうすりや、あれの代になつても、また一生頭が上がりずに、貧乏たれで暮さにやらんせに、今、ちいと物入れて学校へでもやつといてやつたら、また何ぞになろうと思つていない。」と、おきのは答えた。

「ふむ。そりや、まあえいが、中学校を上つたつて、えらい者になれやせんぜ。」

「うちの源さん、まだ上へやる云いよらあのだ。」

「ふむ。」と、叔父は、暫らく頭を傾けていた。

「庄屋の旦那が、貧乏人が子供を市の学校へやるんをどえらい嫌うとるんじやせにやつても内所うちどころにしっかりとやらんぜ。」と、彼は、声を低めて、しかも力を入れて云つた。

「そうかいな。」

「誰れぞに問われたら、市へ奉公にやつたと云うとくがえいぜ。」

「はあ。」

「ようく、氣をつけにやらんぜ……」と叔父は念をおし

た。そして、立つて豚小屋を見に行つた。

「この牝メはすかく肥えるじやないかいや。」

親豚は、一カ月程前に売つて、仔豚のつがいだけ飼っている。その牝の方を指して叔父はそう云つた。

「はあ。」と、おきのは云つて、彼女も豚小屋の方へ行つた。

「豚を十匹ほど飼うたら、子供の学資くらい取られんこともないんじやがな、……何にせ、ここじや、貧乏人は上の学校へやれんことにしとるせに、奉公にやつたと云うとかにやいかんて。」と、叔父は繰り返した。

おきのは、叔父の注意に従つて、息子のことを訊ねられると、傘屋へ奉公に出したと云つた。併し、村の人々は、彼女の言葉を本当にしなかつた。でも、頑固に、「いいえいな、家に、市の学校へやつたりするかいしうがあるもんかいな。食うや食わずじやのに、奉公に出したんにきまつたら。」と、彼女は云い張つた。

が、人々は却つて皮肉に、

「お前んとこにや、なんぼかこれが（と拇指おやびと示指さしびとで円るものをこしらえて、）あるやら分らんのに、何で、一人息子を奉公やかいに出したりすらあ！ 学校へやつたんじやが、うまいこと嘘をつかあ、……まあ、お前んとこの子供はえらいせに、旦那さんにもなるわいの、ひひひ……。」

おきのは、出会あひました人々から、嫌味を浴せかけられるの

がつらさに、

「もういっそ、やめさして、奉公にでも出すかいの。」と源作に云ったりした。

「奉公やかい。」と、源作は、一寸冷笑を浮べて、むしむしした調子で、「己等一代はもうすんだようなもんじやが、あれは、まだこれからじや。少々のお金を残してやるよりや、教育をつけてやとく方が、どんだけ為めになるやら分らん。村の奴等が、どう云おうがかもうたこつちやない。庄屋の旦那に錢を出して貰うんじやなし、俺が、錢を出して、俺の子供を學校へやるのに、誰に氣兼ねすることがあるかい。」

おきのは、叔父の話をきいたり、村の人々の皮肉をきいたりすると、息子を學校へやるのが良くないような氣がするのだったが、源作の云うことをきくと、源作に十二分の理由があつて、簡單、明瞭で、他から文句を云う余地はないように思われた。

224

試験がすんで、帰るべき筈の日に、おきのは、停車場へ迎えに行った。彼女は、それぞれ試験がすんで帰ってくる坊っちゃん達を迎えに行っている庄屋の下婢や、醬油屋の奥さんや、呉服屋の若旦那の眼につかぬように、停車場の外に立って息子を待っていた。彼女は、自分の家の地位が低いために、そういう金持の間に伍することが出来ない

ように、自から、卑下していた。そして、また、實際に、穢いドン百姓の鼻と見下げられていた。

やがて、汽車が着くと、庄屋や、醬油屋や、呉服屋などの坊っちゃん達が降りて来た。

「お母あさん。」と、醬油屋の坊っちゃんは、プラットホームに降りると、すぐ母を見つけて、こう叫びながら、奥さんのいる方へ走りよった。片隅からそれを見ていたおきのは、息子から、こうなれなれしく、呼びかけられたら、どんなに嬉しいだろうと思つた。

「坊っちゃんお帰り。」と庄屋の下婢は、いつもぼかんと口を開けている、少し馬鹿な庄屋の息子に、叮嚀にお辭儀をして、信玄袋を受け取った。

おきのは、改札口を出て来る下車客を、一人一人注意してみたが、彼女の息子はいなかった。確かに、今、下車した坊っちゃん達と一緒に、試験がすんで帰って来る筈だった。村をたつて行つた日は異なつていたが、學校は同じだった。彼女は、乗り越したのではあるまいかと心配しながら、なお立って、停車場の構内をじろ／＼見廻した。

「僕、算術が二題出来なんだ。國語は満点じゃ。」醬油屋の坊っちゃんは、あどけない声で奥さんにこんなことを云いながら、村へ通じている県道を一番先に歩いた。それにづいて、下車客はそれぞれ自分の家へ帰りかけた。

「谷元は、皆な出来た云いよつた。……」こういう坊っちゃんの声も聞えた。谷元というのは源作の姓である。

おきのは、走りよつて、息子のことを、訊ねてみたかったが、醬油屋へ、良人の源作が労働に行つていたのを思い出して、なお卑下して、思い止まった。

停車場には、駅員の外、誰れもいなくなつた。おきのは、悄々と、帰りかけた。彼女は、一番あとから、ぼつ／＼行つてゐる呉服屋の坊っちゃんに、息子のことを訊ねようと思つた。坊っちゃんは、兄の若旦那と、何事か——多分試験のことだろう——話しあつて笑つてゐた。あの話がすんだら、近づいて訊ねよう、とおきのは心で考えた。うつかりして乗り越すようなあれじゃないが、……彼女は一方でこんなことも思つた。

若旦那の方に向いて、しきりに話してゐる坊っちゃんの顔に、彼女は注意を怠らなかつた。そして、話が一寸中断したのを見計らつて、急に近づいて、息子のことをきいた。「谷元はまだ残つとると云いよつた。」と、坊っちゃんは、彼女に答えた。

「試験はもうすんだんでござんしょうな。」

「はあ、僕等と一緒にすんだんじやが、谷元はまだほかを受ける云いよつた。」

「そうでござんすか。どうも有りがとうさん。」と、おきのは頭を下げた。彼女は若旦那に顔を見られるのが妙に苦るしかつた。

翌日の午後、従弟から葉書が来た。県立中学に多分合格してゐるだろうが、若し駄目だったら、私立中学の入学試

験を受けるために、成績が分るまで子供は帰らせずに、引きとめてゐる。ということだった。

「もう通らなんだら、私立を受けさしてまで中学へやらいでもえいわやの。家のような貧乏たれに市の学校へやつて、また上から目角に取られて等級でもあげられたら困らやの。」と、おきのは源作に云つた。

源作は黙つてゐた。彼も、私立中学へやるのだつたら、あまり気がすすまなかつた。

五

村役場から、税金の取り立てが来ていたが、丁度二十八日が日曜だったので、二十九日に、源作は、銀行から預金を出して役場へ持つて行つた。もう昨日か、一昨日かに村の大部分が納めてしまつたらしく、他に誰れも行つていなかった。収入役は、金高を読み上げて、二人の書記に算盤をおかしてゐた。源作は、算盤がひと仕切りすむまで待つてゐた。

「おい、源作！」

ふと、囁れた、太い、力のある声がかした。聞き覚えのある声だった。それは、助役の傍に来て腰掛けてゐる小川という村会議員が云つたのだ。

「はあ。」と、源作は、小川に気がつくと思つた。小川は、自分が村で押しが利く地位にゐるのを利用して、貧乏人や、自分の氣に食わぬ者を困らして喜んでゐる男であつた。源

作は、頼母子講を取った、抵当に、一段二畝の畑を書き込んで、其の監査を頼みに、小川のところへ行つた時、小川に、抵当が不十分だと云つて頑固にはねつけられたことがあつた。それ以来、彼は小川を恐れていた。

「源作、一寸、こっちへ来んか。」

源作は、呼ばれるまゝに、恐る／＼小川の方へ行つた。

「源作、お前は今度息子を中学へやつたと云うな。」肥つた、眼に角のある、村会議員は太い声で云つた。

「はあ、やつてみました。」

「わしは、お前に、たつてやんなとは云わんが、労働者が、息子を中学へやるんは良くないぞ。人間は中学やかいへ行つちや生意氣になるだけで、働かずに、理屈ばかりこねて、却つて村のために悪い。何んせ、働かずにぶら／＼して理屈をこねる人間が一番いかん。それに、お前、お前はまだこの村で一戸前も持つとらず、一人前の税金も納めとらんのだ。子供を学校へやつて生意氣にするよりや、税金を一人前納めるのが肝心じや。その方が国の為めじや。」と小川は、ゆっくり言葉を切つて、じろりと源作を見た。

源作は、びく／＼唇を顫わした。何か云おうとしたが、小川にこう云われると、彼が前々から考えていた、自分の金で自分の子供を学校へやるのに、他に容喙されることはないという理由などは全く根拠がないように思われた。

「税金を持つて来たんか。」

「はあ、さようで……」

「それそうじや。税金を期日までに納めんような者が、お前、息子を中学校へやるとは以ての外じや。子供を中学やかいへやるのは国の務めも、村の務めもちゃんと、一人前にすましてからやるもんじや。——まあ、そりや、お前の勝手じやが、兎に角今年から、お前に一戸前持たすせに、そのつもりで居れ。」

小川は、なお、一と時、いかつい眼つきで源作を見つめ、それから怒っているようにぶいと助役の方へ向き直つた。収入役や書記は、算盤をやめて源作の方を見ていた。源作は感覚を失つたような氣がした。

彼は、税金を渡すと、すぐご役場から出て歸つた。

星飯の時、

「今日は頭でも痛いんかいの。」と、おきのは彼の憂鬱に硬ばっている顔色を見て訊ねた。彼は黙つて何とも答えなかつた。

飯がすんで、二人づれで畠へ行つてから、おきのは、「家のような貧乏たれに、市の学校やかいへやるせに、村中大評判じや。始めつからやらなんだらよかつたのに。」と源作に云つた。

源作は何事か考えていた。

「もう県立へ通らなんだら、私立へはやるまいな。早よ呼び戻したらえいわ。」

「うむ。」

「分に過ぎるせに、通つとつても、やらん方がえいじやけれど……」とおきのは独言^{ひとりごと}った。

暫らくして、

「そんなら、呼び戻そうか。」と源作は云った。

「そうすりやえいわ。」おきのはすぐ同意した。

源作は畠仕事を途中でやめて、郵便局へ電報を打ちに行った。

「チチビヨウキスグカエレ」

いきなりこう書いて出した。

帰りには、彼は、何か重荷を下したようで胸がすつとした。

息子は、びっくりして十一時の夜汽車であわてゝ帰つて来た。

三日たつて、県立中学に合格したという通知が来たが、入学させなかった。

息子は、今、醬油屋の小僧にやられている。

(一九三三年三月)

窃む女

—

子供が一人ぐらいの時はまだいゝが、二人三人となると、育てるのがなかなか容易でない。子供のほしがるものは親として出来るだけ与えたい。お菓子、おもちゃ、帽子、三輪車——この頃は田舎でも三輪車が流行^{はやり}っている。女の子は、少し大きくなると着物に好みが出来てくる。一ツ身や、四ツ身を着ている頃はまだいゝ。しかし四ツ身から本身に變る時には、拵^{こしら}えてやつても、拵^{こしら}えてやつてもなお子供は要求する。彼女達は絶えず生長しているのである。生長するに従つて、その眼も、慾望も變化し進歩しているのだ。

清吉は三人の子供を持っていた。三人目は男子だったが、上の二人は女だった。長女は既に十四になっている。

夫婦揃つて子供思いだったので、子供から何か要求されると、どうしてもそれをむげに振去ることが出来なかった。肩掛け、洋傘^{ようさん}、手袋、足袋——足袋も一足や二足では足

りない。――下駄、ゴム草履、櫛、等、等。着物以外にも
こういう種々なるものが要求された。着物も、木綿縞や、
瓦斯紡績だけでは足りない。お品は友染の小浜を去年から
ほしがっている。

二人は四苦八苦しなから、子供の要求を叶えてやった。
しかし、清吉が病気に罹って、ぶら／＼しだしてから、子
供の要求もみな／＼聞いてやるのが出来なくなつた。お
里は、家計をやりくりして行くのに一層苦しみだした。

暮れになって、呉服屋で暫文私をやりだすと、子供達は、
店先に美しく飾りたてられたモスリンや、サラサや、半襟
などを見て来てはそれをほしがった。同年の誰れ彼れが、
それぞれ好ましいものを買って貰つたのを知ると、彼女達
はなおそれをほしがった。

「良っちゃんは、大島の上下揃えをこしらえたんじゃ。」
お品は縫物屋から帰って来て云つた。

「うち（自分のこと）毛のシャツを買うて貰おう。」次女
のきみが云つた。

子供達は、他人に負けないだけの服裝をしないと、いや
がつて、よく外へ出て行かないのだ。お品は、三四年前に
買った肩掛けが古くなつたから、新しいのをほしがった。

清吉は、台所で、妻と二人きりになると、
「ひとつ山を伐ろう。」と云いだした。

お里はすぐ賛成した。

山の困栗を伐つて、それを薪に売ると、相当、金がはい

るのであった。

二

正月前に、困栗山を伐つた。樹を伐るのは樵夫を頼んだ。
山から海岸まで出すのは、お里が軽子で背負つた。山出し
を頼むと一束に五銭ずつ取られるからである。

お里は常からよく働く女だった。一年あまり清吉が病ん
で仕事が出来なかつたが、彼女は家の事から、野良仕事、
山の仕事、村の人夫まで、一人でやってのけた。子供の面
倒も見てやるし、清吉の世話もおろそかにしなかつた。清
吉は、妻にすまない気がして、彼自身のことについては、
なるだけ自分でやった。が、お里の方では、そんなことで
良人が心を使つて病気が長びくと困ると思つていた。清吉
の前では快活に骨身を惜まずに働いた。
木は、三百束ばかりあった。それだけを女一人で海岸ま
で出すのは容易な業ではなかつた。

お里が別に苦しうにこぼしもせず、石が凸凹している
峻しい山路を上り下りしているのを見ると、清吉はたまら
なかつた。

「ひまがあつたら、木を出せえ。」彼は縫物屋が引けて帰
つたお品に云いつけた。

「きみも出すか、一束出したら五銭やるぞ。」

姉よりさきに帰っている妹にも云つた。きみはまだ小さ
くて、一束もよく背負えなかつたが、

「一束に五錢呉れるん。そんなら出さあ。」

きみは、口を尖らして、眼をかざやかした。

「出すことなるか？」

「うん、出さあ。一束よう出さなんたら、半束ずつでも出さあ。」

「そうかい。」彼は笑った。

三

木代が、六十円ほどはいったが、年末節季の払いをする
と、あと僅かしが残らなかつた。予め心積りをしていた払
いの外に紺屋や、桶直し、按摩賃、市公の日傭賃などが、
だいぶいっただ。病気のせいで彼はよく肩が凝った。で、
しょっちゅう按摩を呼んでいた。年末にツケを見ると、そ
れだけでも、かなり嵩ばっていた。それに正月の用意もし
なければならぬ。

自分の常着も一枚、お里は、ひそかにそう思っていたが、
残り少ない金を見てがっかりした。清吉は、失望している
妻が可愛そうになつた。

「それだけ皆な残さずに使つてもえいぜ。また二月にでも
なれや、なんとか金が這入つ来んこともあるまい。」と云
つた。

「えい。……」

声が曇つて、彼女は下に向いたまゝ彼に顔を見せなかつ
た。……

正月二日の初売出しに、お里は、十円握つて、村の呉服
屋へ反物を買に行つた。子供達は母の帰りを待つていた
が、まもなく友達がさそひに來たので、遊びに行つてしま
つた。清吉は床に就いて寝ていた。

十時すぎにお里が帰つて來た。

「一寸、これだけ借りて來てみたん。」彼女は、清吉の枕
頭に來て、風呂敷包を拵げて見せた。

染め紵、モスリン、銘仙紵、肩掛、手袋、などがあつた。

「これ、品の羽織にしてやろうと思つて……」
と彼女は銘仙紵を取つて清吉に見せた。

「うむ。」

「この縞は綿入れにしてやろうと思つて——」

「うむ。」

お里は、よく物を見てから借りて來たであろう反物を、
再び彼の枕頭に拵げて縞柄を見たり、示指と拇指で布地を
たしかめたりした。彼女は、彼の助言を得てから、何れに
かはつきり買うものをきめようと思つてゐるらしかった。

しかし、清吉にはどういふ物がいいのか、どういふ柄が流
行しているか分らなかつた。彼は上向に長々と寝そべつて
眼をつむつていた。彼女はやがて金目を空で勘定しながら、
反物を風呂敷に包んだ。

「友吉にや、何を買うてやるんだ。」清吉は眼をつむつた
まゝきいた。

「コール天の足袋。」